

四種三昧の典拠とその考察〔中〕

——平行半坐三昧・方等三昧について——

大野栄人

一 問題の所在

近年、仏教儀礼に関する研究が盛んに行なわれるようになつてきている。それに歩調を合わせるわけではないが、天台智顕の禪觀体系の源流を究明していく途上、『摩訶止

観』卷第二上・下に説示する「四種三昧」の問題に遭遇した。△四種三昧△は、とくに中国天台初期教団の僧俗間において、実際に具体的実践法として実修されていった。また現在の日本天台においても、重要な実踐行規として依用されている。

天台智顕の教學は、華嚴の大成者法藏の教學とともに、

中国仏教史上における二大巨頭とされる。しかし、智顕の言句のみとりあげて、ただそのすばらしさを讃歎するのみ

では、學問上何等の意味もない。智顕の思想的展開と、主

体的な經典の捉把はあるにしても、やはり智顕の教學は、どこまでも諸經論の原意を重視している。經論を離れて、智顕の教學はありえないことが、以下の考察によつて明らかとなるであろう。

△四種三昧△の「常行三昧・常坐三昧」については、すでに愛知学院『禪研究所紀要』(第六・七合併号)の紙上で論究した。この小論は、その続編をなすもので、「平行半坐三昧」として、「方等三昧」と「法華三昧」が説示されているが、その中の「方等三昧」について論究し、文献的根拠を解明しようとするものである。

「方等三昧」に關係する智顕の撰述として、この『摩訶止観』卷第二上の「平行半坐三昧」の一つとして説示する

「方等三昧」の他に、別行本として、『方等三昧行法』があり、また、『国清百録』卷第一に収録されている『方等讃法』がある。『摩訶止観』所説の「方等三昧」の典拠を解明するとともに、他の二本とも思想上の比較をなす関係

二 半行半坐三昧△方等三昧▽の典拠

上、対照表によつて明示する。『摩訶止観』の説相と、典拠になる諸經論、他の二本との相違点や問題点を究明することにしたい。上段に『摩訶止観』の文を、下段に典拠となる諸經論の文をあげることにする。

『摩訶止観』卷第二上（大正蔵四六・一三a—一四a）
の文

『大方等陀羅尼經』（大正蔵二一・六四一a—六六一a、
『方等經』と略）／『方等三昧行法』（大正蔵四六・九四三
a—九四九a、『行法』と略）／『方等讃法』（大正蔵四
六・七九六b—七九八c、『讃法』と略）の文、その他

1 三明平行半坐。亦先方法、次勸修。方法者、身開遮。
口說默・意止観。此出二經。

2 方等云、旋百二十匝、却坐思惟。

誦此章句百二十通、遶百二十匝。如是作已却坐思惟（『方等經』六四五b）／次百二十匝旋、誦百二十遍呪……然後却坐思惟（『讃法』七九七b）。

3 法華云、其人若行若立詠誦是經、若坐思惟是經、我乘六牙白象、現其人前。

是人若行若立詠誦此經、我爾時乘六牙白象王、大菩薩衆俱詣其所、而自現身。……是人若坐思惟此經。爾時我復乘白

象王、現其人前（『法華經』普賢勸發品、大正藏九・六一
a—b）。

故知俱用半行半坐為方法也。

5 4 方等至尊不可聊爾。
6 若欲修習神明為証。

7 先求夢王。若得見一、是許懺悔。

仏告華聚我今語汝、莫妄宣伝如是妙法。當以神明為証。
何以故名為神明。善男子、如是當有十二夢王、見此一王者
乃可為說。（『方等經』六四二a）。

汝當教求十二夢王。若得見一王者、汝當教授七日行法（『方
等經』六五二a）／請十二夢王、求乞見其形相。若感一一相
者、方可得行如是懺悔（『行法』九四四b）／念是事已、
帰依十二夢王、求乞瑞夢。若不感者、徒行無益、倍加懇
到、餐啜無忘。隨見一王、即是聽許（『懺法』七九七a）。
此人應住一空靜室、塗治極令內外鮮淨（『方等經』六五七
a）／莊嚴一間以為道場、其次一間香泥塗地以為淨室（『行
法』九四五b）。

復應請二十四形像。若多無妨。作種種餚饌飲食、供養衆僧
及此比丘。……作種種香塗泥其室內綵画之。……若月善男
子善女人、於初日分中至道場、應以塗香末香栴檀沈香熏陸
海渚岸香、應以供養摩訶怛持陀羅尼經（『方等經』六四六
b—六五〇b—六五二b）／應作圓壇。……以香泥塗地、

高座置上、請二十四像并座。……作五色圓蓋懸於壇上。
……以種種香熏陸棧沈塗末海渚岸香、及以香湯常置一盆。
……隨力堪能並無妨也。（『行法』九四五a）／香泥泥地散誕圓
壇、彩画莊嚴擬於淨土、燒香散華懸五色蓋、及諸繪幡、請

二十四軀像。設百味食（『餓法』七九七b）。

出家在家皆須具備三種衣服。悉須新淨。若無新者、浣故令
淨、以香湯渡之。……又須辦革屣兩量軟細者、又要須新作
大小兩廁。……必以新淨之衣入於內淨、無令淨觸混雜（『行
法』九四五c—九四五a）／委以經紀須新淨衣一通、無新
浣故（『餓法』七九七a）。

七日長齋、日三時洗浴著淨潔衣（『方等經』六四五b）／七
日長齋、日三時洗浴、著淨潔衣。……日三時浴者不可闕也
（『行法』九四三b—九四五b）／設百味食、一日三時洗浴
著新衣（『餓法』七九七b）。

請諸衆僧隨意堪任不問多少（『方等經』六四六b）／須初日
一供養、後七日滿一供養。解道場日、請衆僧不限多少（『行
法』九四五a）。

應向師說如法除滅如是罪咎。……若欲除滅八重禁罪、先請
一比丘了知内外律者、陳其罪咎向彼比丘、彼比丘應如法而
教此内外律（『方等經』六五六c・六五七a—b）／請一比

- 10 須新淨衣輕屬、無新浣故。出入著脫無令參雜。
- 11 七日長齋、日三時洗浴。
- 12 初日供養僧、隨意多少。
- 13 別請一明了內外律者為師、受二十四戒及陀羅尼呪、對
師說罪。

丘解内外律者、為懺悔主。若受戒時師將至、大衆於仏像前、為受二十四重戒（『行法』九四六a—b）／依一明解內外律師發露受二十四戒、受呪預誦使誦十仏十法王子十二夢王名（『懺法』七九七a）。

14 要用月八日十五日。

15 当以七日為一期、決不可減。若能更進隨意堪任。

要用月八日十五日行此法（『方等經』六四五c）／用月八日十五日。……月八日十五日可入道場（『行法』九四三b・九四五a）。

至於道場修行七日、此人功德復過於上一切所作。……仏告阿難、隨意堪任至於道場。阿難白仏、若有受者尽形受耶。仏告阿難亦如上法、隨意堪任受諸戒律（『方等經』六四九b・六五一a）／則有七日要期。無作戒法生起。更不得余事、中途有廢一、則違前要心。作禁法不成、則令善心有間不得相続（『行法』九四六a）。

世尊行此法時得衆多人不。仏告阿難十人已還（『方等經』六五〇b）／行人極多數可至十人已還。不慮過數、則違教法。行者若多即須別作道場（『行法』九四五a）／道伴多少十人已還（『懺法』七九七b）。

阿難白仏、若不除者、云何語言具於三衣。仏告阿難、言三衣者、一名單縫・二名俗服。阿難白仏言、世尊向說、一出家衣・二在家衣。若在家者用三種為。仏告阿難、一出家衣

者、作三世諸仏法式。一俗服者、欲令我弟子趣道場時當著一服（『方等經』六五一a）／出家在家皆須具備三種衣服。……一是出家衣、但單縫者為異、此衣擬入道場時著、作三世諸仏法式（『行法』九四四c—九四五a）。

口説默者

19 18
預誦陀羅尼呪一篇使利。於初日分異口同音。

20 三遍召請三寶十仏方等父母十法王子。

21 召請法在國清百錄中。

作是語時應默心中、誦摩訶薩持陀羅尼章句。……於初日分中至道場。……爾時二士異口同音而讚道場行者（『方等經』六五〇b・六五二b）。

作是念已當奉請三寶。……一心奉請南無寶王仏乃至十仏具出經文。一心奉請南無摩訶薩持陀羅尼方等父母。一心奉請十法王子華聚雷音。……凡三遍召請（『懺法』七九七b）。

方法第三。前諸方便弄引淳熟、渴仰顛顛不惜身命。刻日定時道場行法、初入之始月有二日。道伴多少十人已還。香泥泥地散誕圓壇、彩画莊嚴擬於淨土、燒香散華懸五色蓋及諸繪幡。請二十四軀像、設百味食。一日三時洗浴著新衣、手執香爐、一心一意散禮一拜、互跪運念、念此香雲、遍覆十方普雨一切寶一切味衣服臥具、樓閣殿堂絃出法聲。上供諸聖下施衆生、承佛神力廣作仏事、利益一切皆入仏道。與虛空法界等。作是念已當奉請三寶、使声声運念淚流千臉、如向死地求於大力。一心奉請南無寶王仏乃至十仏具出經文。

一心奉請南摩訶袒持陀羅尼方等父母 一心奉請十法王子華聚雷音 一心奉請舍利仏等一切聲聞緣覺 一心奉請梵祇十二夢王凡三遍召請（『懺法』七九七b）。

請竟燒香運念三業供養。

23 22

供養訖礼前所請三寶、禮竟以志誠心悲泣雨淚、陳悔罪咎竟、

24

起旋百二十匝。一旋一呪、不遲不疾不高不下。旋呪竟、礼十仏方等十法王子。如是作已、却坐思惟、思惟訖、更起旋呪、旋呪竟、更却坐思惟。周而復始、終竟七日。其法如是。從第二時略召請、余悉如常。

（『懺法』七九七b）。

誦此章句百二十遍、遶百二十匝。如是作已却坐思惟、思惟訖已、復更誦此章句。如是七日（『方等經』六四五b—c）／一周有一百二十匝、誦呪一百二十遍為一周。……可預調習令熟遲駛斎等。從容共行一百二十遍、不高不下緩不急。誦呪令自耳聽分明不得錯謬（『行法』九四六a）／次百二十匝旋、誦百二十遍呪。一匝一呪、声不龜不細遲疾允當。旋誦訖、當礼十仏十王子。更略披陳發願、然後却坐思惟、觀一実相。觀法出余文。思惟竟、更起整服、礼仏一拜。更旋百二十匝、誦百二十遍呪。呪旋訖、礼三寶、自陳罪咎。還坐思惟。如是作已、周而復始。唯第二日略去召請、余事終竟七日也（『懺法』七九七b—c）。

意止觀者

四種三昧の典拠とその考察 [中] (大野)

25

26 經令思惟、思惟摩訶怛持陀羅尼。翻為大秘要遮惡持善。秘要祇是實相中道正空。

27 經言、吾從真実中來。真實者寂滅相、寂滅相者無有所求。求者亦空、得者・著者・實者・來者・語者・問者悉空。寂滅涅槃亦復皆空、一切虛空分界亦復皆空△其一▽

28 無所求中吾故求之。如是空空真實之法、當於何求、六波羅蜜中求△其二▽

29 此與大品十八空同。

我當以摩訶怛持陀羅尼章句、伏此波旬增彼比丘善根。汝今諦聽當為汝說諸仏秘法。……如是作已却坐思惟（『方等經』六四二a、六四五b）。

時有一菩薩、名曰上首、作一乞士入城乞食。時有一比丘名曰恒伽、謂、乞士言汝從何來。答言、吾從真實中來。恒伽問言、何謂為實。曰、寂滅相故名為真實。曰、寂滅相中有所求耶。上首答言、無有所求。曰、無所求者當何用求。上首答言、無所求中吾故求之。曰、無所求中何用求為。答言、有所求者一切皆空、得者亦空、著者亦空、實者亦空、來者亦空、語者亦空、問者亦空。寂滅涅槃亦復皆空、一切虛空分界亦復皆空（『方等經』六四五a）。

吾為如是次第空法而求真實。恒伽曰、實何用求汝言一切方法亦復皆空、何用求為。答曰、以空空故為實。問曰、菩薩今當於何而求實法。答曰、當於六波羅蜜中求。問曰、何謂為六。所謂檀波羅蜜・尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜（『方等經』六四五a）△是故行者以寂滅相、行六波羅蜜。無所求中吾故求之仏實法（『懺法』七九六c）。

△內・外・内外・空・大・第一義・有為・無為・畢竟・無始・散・性・自相・諸法・不可得・無法・有法・無法有法

30

大經迦毘羅城空・如來空・大涅槃空。更無有異。

31

以此空慧歷一切事、無不成觀。

32

方等者、或言廣平。今言、方者法也。般若有四種方法、謂四門入清涼池、即方也。所契之理・平等大慧、即等也。令求夢王、即二觀前方便也。道場即清淨境界也、治五住糠穎寒相米、亦是定慧用莊嚴法身也。香塗者、即無上尸羅也。

空（『大品般若經』卷第五、大正藏八・二五〇b—二五一
a／『大智度論』卷第三一、大正藏二五・二八五b—二九
六b）▽

色亦空・眼亦空・識亦空・如來亦空・大般涅槃亦空。是故菩薩見一切法悉是空。是故我在迦毘羅城（『南本涅槃經』卷第二四、大正藏一二・七六五c）。

若分別者即名菩薩著我人壽者亦著行者、不名菩薩住心中道得究竟慧。……善男子、我因是已來、得入究竟慧住心中道。阿羅漢都無是事。云何當得究竟慧耶。以毀大乘讚諸小乘。是故不得究竟慧耳（『方等經』六五五b—六五六a）／表法第五。行者、既識十心逆順、以正觀心歷衆事、一一緣中皆表勝法、心心相續觀道無間、入不二門（『懺法』七九八a）。

言方等呪者、觀寘相理、理不可說、而無不說。赴四機緣、作四方法、說於寘相故名為方。雖作是說、說即無說。無說即空、空故不見說与不說。無邊無中名之為等。又得逗機有說、說於此呪、呪於三障。能呪之法既不可說、所呪之罪亦不可說。無罪故無生死、無呪故無涅槃、畢竟清淨故名方等呪也。香泥塗地采画莊嚴者、地表法性、香表福德、画表智慧、福慧二種莊嚴法身也（『懺法』七九八a—b）。

- 33 五色蓋者、觀五陰免子縛、起大慈慈覆法界也。
- 34 圓壇者、即實相不動地也。繪幡即翻法界上迷、生動出之解。幡壇不相離、即動出不動出不相離也。香燈即戒慧也。
- 35 高座者、諸法空也、一切仏皆栖此空。
- 36 二十四像者、即是逆順觀十二因緣覺了智也。
- 37 餚饌者、即是無常苦酢、助道觀也。
- 38 新淨衣者、即寂滅忍也。瞋惑重積稱故、翻瞋起忍名為新。
- 39 七日即七覺也。
- 40 一日即一実諦也。三洗即觀一實修三觀、蕩三障淨三智。
-
- 若有比丘、求於此法、於其夢中上於高座転千般若。如是見者、即是波林羅（『方等經』六五一-a、『行法』九四四-a-b）以香泥塗地、高座置上（『行法』九四五-a）。
- 二十四形像者、表十二因緣逆順觀也。凡二十四支、順觀十二覺三仏性、逆觀十二覺三仏性。所謂無明・愛・取是了因仏性、行・有是緣因仏性、識・名色等是正因仏性。覺二十四支、即二十四仏也（『餓法』七九八-b）。
- 作種種餚饌飲食、供養衆僧及此比丘（『方等經』六四六-b）百味食者、表一切法中皆有中道法喜禪悅味也（『餓法』七九八-b）。
- 著新衣者、表寂滅忍覆二邊醜陋也（『餓法』七九八-b）。
- 一日三時洗浴者、即表緣一實修三三昧、遣蕩無明・塵沙・

也。

一師者、即一實諦也。

二十四戒者、逆順十二因緣發道共戒也。

44 43

42 41

呪者囑對也。

瓔珞、明十二因緣有十種、即有一百二十支。一呪一
支、束而言之祇是三道。謂苦・業・煩惱也。今呪此因
緣、即是呪於三道、而論饑悔。

見思垢膩、顯淨法身也（『饑法』七九八b）。

善男子、是名菩薩摩訶薩二十四戒。善男子、在在处处莫妄宣說諸仏秘法（『方等經』六四六b）／凡二十四支、順觀十二覺三仏性、逆觀十二覺三仏性（『饑法』七九八b）。

一呪對破一支（『饑法』七九八b）。

所謂十二因緣十種照。一我見十二因緣、二心為十二因緣、三無明十二因緣、四相緣由十二緣、五助成十二緣、六三業十二緣、七三世十二緣、八三苦十二緣、九性空十二緣、十縛生十二緣。逆順觀故現無量身、入一切仏土化一切衆生故（『菩薩瓔珞本業經』卷下、大正藏二四・一〇一五a）／達百二十匝者、即表十二因緣、凡十種觀有百二十支。束而言之但是三道。愛・取是煩惱道、行・有是業道、識・名色等是苦道。循環三道、常為觀境、故達百二十匝也。一呪對破一支、即破三道、三道破即是三障破（『饑法』七九八b）。

事饑悔苦道・業道、理饑悔煩惱道。

文云、犯沙弥戒乃至大比丘戒、若不還生、無有是処。
即饑業道文也。

46 45

四種三昧の典拠とその考察〔中〕（大野）

若比丘於世尊去世之後若毀四重、若比丘尼毀犯八重、若菩薩若沙弥・沙弥尼・優婆塞・優婆夷、若毀如是一一諸戒。
……是諸戒根、若不還生、終無是処（『方等經』六四五c・

六五六 b) / 經云、若犯三自帰、乃至六重菩薩二十四戒・沙弥・沙弥尼・比丘・比丘尼等戒、能至心饑。若不還生無有是處。當知方等能滅一切惡業罪障、必無疑也（『饑法』七九六 c）。

47 眼・耳諸根清淨。即饑苦道文也。

48 第七日見十方仏、聞法得不退転。即饑煩惱道文也。

乃一饑悔隨師修行。是諸惡業若不除滅終無是處。……我昔愚行業因緣故十方虛空法界、及大地土山河叢林尽末為籌。……我所犯戒。……不能救我如是等苦、我即思惟如是事已。……當知彼比丘尼住清淨地具清淨戒（『方等經』六五六 c）／又云、地獄餓鬼極惡報處、以經威力聞即悟道、改醜陋形。又云、身有白癩一心饑悔。若不除瘥亦無是處。當知此經能轉一切重惡報障（『饑法』七九六 c）。

於第七日分中在於道場。……爾時當有十方一切諸仏世尊在於虛空。……隨其根量而為說法。……即發阿耨多羅三藐三菩提心、而不退転。於七日中得隨意生（『方等經』六五三 b + c）／乃至第七日諸仏大衆皆來、量根說法發菩提心、而不退転者。當知此經能破煩惱障（『饑法』七九六 c）。名字即空還源返本畢竟清淨。是為觀罪性空、翻破無明、顛倒、執著。無明滅故諸行滅、諸行滅故生死滅。十二因緣大樹壞（『饑法』七九八 a）。

50 故名諸仏實法饑悔也。

諸仏得道、皆由此法。是仏父母、世間無上大宝。若能修行得全分宝、但能詠誦得中分宝、華香供養得下分宝。仏与文殊說下分宝、所不能尽、況中上耶。若從地積宝至梵天以奉於仏、不如施持經者一食充軀。如經廣說云云。

善男子、以是因縁、當知此經有無量威神功德之力。以是因緣我今語汝、受持此經我去世後。此經若在閻浮提内、即是衆生大珍寶也。若能修行受持詠誦、當知是人全用宝者。若復有人但能詠誦、當知是人得中分宝。若以種種塗香末香花繪幡蓋而供養者、當知是人得下分宝。善男子、吾今為汝說下分宝因縁之相。善男子、若有一人、神通無礙如文殊師利亦喻於我。弁才無礙喻我二人、於一劫中常以弁才、能為無量無邊衆生說法（『方等經』六四七c—六四八a）／經又言、若能修行得全分宝、但能詠誦得中分宝、華香供養得下分宝。……破諸煩惱出無明殼、長與苦別。具足聖道上菩薩位、度脫一切衆生。廣為三界而作父母者。……故云、弁若文殊於一劫中、教化一切令登補處、格其功德不及下分宝者、況上分耶。又一切聲聞辟支仏、十信補處如恒河沙、同入深禪思惟、功德不如一分。又四天下寶、奉施如來、不如有人施持經者一食充軀。何唯疑審如是否、七仏即現証實不虛、三世如來、皆由此法得成仏道（『懺法』七九六c—七九七a）。

三 問題の究明

以上において、「方等三昧」の直接・間接の典拠を究明した。いま、典拠となつた諸經論と、その依用回数を記すところのことである。

(典拠となつた諸經論)

| | (直接) | (間接) | (合計) |
|------------------|------|------|------|
| ①『方等陀羅尼經』 | 二二回 | 三回 | 二四回 |
| ②『大品般若經』(『大智度論』) | 一回 | 一回 | 一回 |
| ③『大般涅槃經』 | 一回 | 一回 | 一回 |
| ④『菩薩瓔珞本業經』 | | | 一回 |
| ⑤『方等三昧行法』 | 一三回 | 一回 | 一四回 |
| ⑥『方等懺法』 | 二五回 | 一回 | 二六回 |
| ⑦『法華三昧懺儀』 | 一回 | 一回 | |

ただし右以外にも、(3)の上段に、『法華經』普賢勸發品の文を挙げるが、この文は、「法華三昧」が「平行半坐三昧」であるという經証であり、「方等三昧」に関係ないのを除外した。右の表により依用回数の多い順に記すと、『方等懺法』『方等陀羅尼經』『方等三昧行法』の次第で、あとは『大品般若經』(『大智度論』)『大般涅槃經』『菩薩瓔珞本業經』『法華三昧懺儀』それぞれ一回である。「方等三

昧」には独自の思想的展開はあるが、先に撰述した『方等懺法』を常に坐右において、『方等陀羅尼經』を根幹として体系づけられた行法であることが知られる。

さて、この「方等三昧」の根幹となつた『方等陀羅尼經』の諸問題に関しては、「方等陀羅尼經に基づく方等懺法の考察——中国における実修とその意義——」と題して、すでに論究したので、ここでは触れない。また、『方等三昧行法』に関しては、「方等三昧行法の研究——智顗の禪觀形成の源流究明——」と題して究明したので、あわせて参考にしていただければ幸甚である。それ故、この小論では、「方等三昧」と、『國清百錄』所収の『方等懺法』の思想的展開を解明することに中心主眼をおいて論究していくたい。

以下、右の対照表に基づいて、順次、問題点について究明していくことにしたい。

まず、(2)の上段において、「方等三昧」が「平行半坐三昧」である経証として、『方等陀羅尼經』の文を挙げる。摩訶祖持陀羅尼の章句を百二十遍誦しながら、百二十匝を達り、誦し達り終つたら坐して思惟するという平行半坐の方法である。坐す方法については、具体的に『方等三昧行

法』の「第二識遮障」の坐禪調適に明記している。すなわち、

四に坐禪調適とは、加趺正坐なり。左脚を以て右脚の上に置き、左手を以て右手の上に置く。牽衣身に近づけ臍と対す。口を開いて三たび胸中の穢氣を吐き、口を開いて熱氣を吐く。口を閉じて冷氣を内にし、然る後に口を閉じて歯才相柱す。眼を閉じて外光を才断す。然る後に平面に住す。要を以て之を言わば、身を寛せず急せざらしむ。若し寛せば則ち頭低垂し、若し急せば則ち胸背煩痛す。故に不寛不急は是れ身の調相なり。⁽³⁾

と、「身の調相」について具体的に記している。つづいて「息の調相」と「心の調相」についても記している。⁽⁴⁾が、長文となるので省略する。いま、この関係を図示すると次のごとくである。

——身の調相——不寛不急
坐禪調適
——息の調相——不浮不滑
——心の調相——不浮不沈

この坐禪の方法については、右の『方等三昧行法』とほぼ同文が、『次第禪門』卷第二に第一入禪調三事の箇処に

説かれ⁽⁵⁾、『天台小止觀』調和第四にあり、また『摩訶止觀』卷第四下の第四調五事の箇処に説示されている⁽⁶⁾。智顕の実践体系は、かく前期時代より実修され、『摩訶止觀』において大成されたものであることが知られる。

さて、(9)の上段と下段の『方等三昧行法』の文を、佐藤哲英博士は比較され、『方等三昧行法』が、智顕の著書であることの論証としておられる⁽⁸⁾。確かに、言句の上からみれば、共通した用語が使用されている。しかし、(9)の下段に記した『方等陀羅尼經』にも、ほぼ同文があることより、『方等陀羅尼經』→『方等三昧行法』→『方等懺法』を経て、『方等三昧』に依用されたとみるほうが自然で、論証にはならぬと考えられる。だからといって、『方等三昧行法』が、智顕の著書でないというのでは毛頭ない。右の对照表に示したごとく、全体に渡って典拠を検討した結果、『方等三昧行法』のみが、典拠となっている箇処はないが、しかし、『方等三昧行法』を常に考慮に入れて論述しており、智顕の著書であることは確実である。先述したように、智顕は、『方等陀羅尼經』を根幹として『方等三昧行法』を著わして、実践の必要上、具体化した行規を組織し、また、『方等三昧行法』をより簡略化した『方等懺法』

を撰述し、この二本を前提として「方等三昧」に体系づけたとみるのが妥当のようである。

(16)の上段の「十人より已還このかた、此を出づることを得ず」の文であるが、佐藤博士は、「人数を十人以内と限定したのは智顕であつたかと思う(19)」と述べられている。しかし、(16)下段に記したように、『方等陀羅尼經』に「世尊、此の法を行するとき、衆の多人なるを得るや不や。仏、阿難に告げたまわく、十人已還なり」とあるので、智顕は明らかに、この『方等陀羅尼經』の文を根拠として説示しており、智顕の独説とする佐藤博士の説は妥当でない。

(2)上段に、「召請法は國清百錄中に在り」とい、下段に記したように、『方等懺法』方法第三に、『方等陀羅尼經』に基づいて、七日間を一期とする召請法について体系化されている。

(2)上段には、三業供養について述べているが、『方等陀羅尼經』および他の二本にも闇説されていない。三業供養について、具体的には、『法華三昧懺儀』に述べられているので、少々長文になるが、いま引くと、

第三に行者の三業供養を明かさば、初めて道場に入り、法座の前に至りて、先ず尼師壇を敷き、正身仰俯し、慮に先ず

一切の衆生の拔与救度を慈念すべし。次に當に懃重の敬心を起し、慚愧し懇惻し想を三宝に在らしむべし。十方の虛空に側塞して、道場に影現したまうと。是の時に、手に香爐を執りて、衆の名香を焼き、種々の華を散じて、三宝を供養し、即ち尋いで五体投地し、口に自から唱えて言え。一心に十方一切常住佛に敬礼す。心は身と口に隨え、一心に頂礼して分散の意なく、此の身は影の如くして実ならずと了知せよ。能礼と所礼とに於いて、心に所得無し、一切の衆生も亦た同じく此の礼仏法界海の中に入る。總じて十方の仏を礼すること一拜なり。次に當に身の威儀を正して、口に自から唱えて言うべし。一心に十方一切常住法に敬礼す。……一心に十方一切常住僧に敬礼す。……（是の諸の衆等人各々蹴跪し）嚴かに香華を持し、如法に供養す。題わくは此の香華雲、十方界に遍満し、一切の仏と經法並びに菩薩・声聞・緣覺衆、及び一切の天仙を供養す。此の香華雲を受け、以て光明台となし、廣く無辯界に於いて、受用して仏事を作さん。⁽¹⁰⁾ とあり、行者が初めて道場に入り、法座の前に至って尼師壇 (nisidana の音写、坐具のこと) を敷いて、身を正して立ち、一切衆生を救濟するという慈悲心を念ず、つぎに敬心をおこし、慚愧し懇惻し、三宝がこの道場に影現する

との想いをなし、手に香爐を持ち香を焼き、種々の華を散じて三宝を供養し、五体投地しながら、口では「一心に十方一切常住仏に敬礼す」「一心に十方一切常住法に敬礼す」「一心に十方一切常住僧に敬礼す」と、おのおの唱える。また、身は影のごとくで実体なく、心に所得のないことを了知させる。

(24)の上段では、懺法の行道の方法を具体的に明記している。下段に記したように、『方等陀羅尼經』を根拠として、『方等三昧行法』『方等懺法』の所説を簡略化している。この箇處をみても「方等三昧」が、『方等三昧行法』や『方等懺法』とは別の意図をもつて体系化されていることが知られるが、詳しくは後述したい。

つぎに、意の止觀を明かすについて、まず、(24)の上段には、「經に思惟せしむとは、摩訶祖持陀羅尼を思惟するなり。翻じて大秘要遮惡持善となす。秘要是ただこれ實相中道の正空なり。」とある。湛然はこの文を注して、初の文に思惟。というは正觀なり。摩訶等とは正境なり。偏小に非ざるを顯わすが故に名づけて大となす。一切法は即ち一法の故に名づけて秘となす。一法に一切法を攝するが故に名づけて要となす。体は三惑を遮し、性は三

智を持つ。二辺の偏に非ざるが故に名づけ正となす。正體は無相の故に名づけて空⁽¹¹⁾となす。

と記している。湛然は、「思惟」を正觀となし、「摩訶祖持陀羅尼」を正境となして、天台智顕の絶対止觀の立場より、この語を釈している。元来、「祖」は、古代中国の礼法の一つで、味方の意を表示するため左肩の衣を脱ぐことをいい、転じて、惡を遮することである。「持」は保つことで、転じて善を保持することである。智顕は、この陀羅尼を、「大秘要遮惡持善」と翻訳するが、「遮惡持善」については、右に述べたことより首肯できる。「大秘要」は秘密の要法のことをいい、湛然は相即論理を用いて、この語を釈している。「秘要」は、『禪密要法經』『治禪病秘要法』などと、經典名になつてゐる用例があり、元来は坐禪修行や病を治するための用意心得のことをいつていたようである。智顕が数ある懺悔法を明かす經典中より、あえてこの『方等陀羅尼經』を依用した背景として、「思惟摩訶祖持陀羅尼」の語があり、智顕はこれを「大秘要遮惡持善」と訳し、この訳語に重要な意義をみいだしたからであると考えられる。智顕はこの「秘要」を「實相中道正空」と述べ、經証として(24)・(25)の上段の『方等陀羅尼經』の二文を

引くが、いづれも『方等陀羅尼經』を実相中道正空を説示する經典として把えたことが知られる。智顕の思想には密教的色彩はみられぬが、密教部に属する經典であれ、いかなる經典であれ、実相中道正空の立場より把促していったことは、智顕の教學の広さと深さを物語つてゐる。とかく現代においては、その宗派の所依とする經論のみを絶対視して、その他の經論は有害であるとする傾向にあるが、すでに出发点より間違つており、偏見に墮しているのは、われわれであることに気づかねばならない。それは智顕が

(29)・(30)の上段で、『方等陀羅尼經』の所説は、『大品般若經』や『大般涅槃經』の教説と同一線上にあることを明示することからも首肯されるであろう。さらに(31)上段には、行道中この空慧（中道得究竟慧）を保持するならば、必ず覺証するという。仏教において、空慧にめざめ、保持することの重要性を語つてゐる。

つぎに、(32)・(33)の上段には、智顕独自の捕捉を開顯して、いるので、下段の主として『方等餓法』の文と比較しながら検討したい。智顕はすでに『方等三昧行法』や『方等餓法』を撰述し、方等餓法の行法を体系化したのであるが、何故に「方等三昧」をへ四種三昧の一つとして説示しな

ければならなかつたのか。その問題の解明を教示してくれるのが、(32)・(33)の文である。ゆえに、「方等三昧」の(32)・(33)の一々の説相と、『方等餓法』の文を比較検討し、思想的展開について論究していきたい。

まず(32)の上段と、下段の『方等餓法』の文を比較したい。『方等餓法』は、經の「方等呪」「香泥を地に塗り采画莊嚴す」の語を、般若空觀の立場から、実相不可説を依用して解釈している。それに対して、「方等三昧」では、般若空觀を根底としながらも、端的に圓教の四門いわゆる円融無礙觀の立場から廣説している。また、『方等餓法』では、「地は法性を表わし、香は福德を表わし、画は智慧を表わす。福慧の二種は法身を莊嚴するなり」と述べるのに對して、「方等三昧」には、「定慧をもつて法身を莊嚴するなり。香塗とはすなわち無上の尸羅なり」とあり、福慧から定慧に思想的な転開をなしてゐる。

(33)の「五色蓋」を釈するに当り、『方等餓法』では、「五陰を表わし、仏性に即せず仏性を離れず、無縁の慈を起して、普ねく一切に覆うなり」と述べている。「無縁の慈」でもって、仏性に當てはめて解釈している。これと同主旨の説示が、『次第禪門』卷第六にある。

五陰は即ち是れ衆生なり。是の五陰を念ずるは此れ慈念なり。……無縁の慈は則ち一切同じく是れ仏性常楽平等の相を見る。⁽¹⁴⁾

この文は、第七釈修証章の四無量心を明かす一段中にみられる。四無量心とは、周知のように、(一)慈無量心、(二)悲無量心、(三)喜無量心、(四)捨無量心のことである。その中の(一)慈無量心には、(イ)衆生縁慈、(ロ)法縁慈、(ハ)無縁慈の三慈があるとする。(イ)衆生縁慈は、無恚・無恨・無怨・無惱と

心相応して、衆生に欲界の樂ないし三四禪の樂を与えるをいう。(ロ)法縁慈は諸の漏尽の阿羅漢・辟支仏・諸仏などの諸の聖人が吾我の相を破し、一異の相を滅して、諸法の和合因縁によつて相続するも但空なりと知る。衆生そのものも五陰にほかならぬと觀するも、衆生は諸法の空なるを知らない。衆生は一心に樂を得ることを願う。聖人はこれを愍れんで、衆生の意に随つて樂を得させることをいう。それに対して、(ハ)無縁慈は諸仏だけのものである。諸仏は有為無為の性中に住することなく、上下・過去・未來現在によらず、諸の因縁は不実顛倒虚誑なりと見る。仏は衆生が諸法實相を知らず、五道に往来し、心は諸法に執著し、さらには分別したり取捨したりするのを愍れんで、衆生に諸

法実相の智慧を得させようとする。諸仏が諸法実相の智慧をもつて衆生をみるならば、一切衆生が仏性の常楽平等相を具足しているといふ。⁽¹⁵⁾『次第禪門』では、さらにこの三慈を禪法に当てはめて、(イ)衆生縁慈は根本禪(四禪・四無量心・四無色定)中に、(ロ)法縁慈は、特勝・通明・背捨などの無漏中に、(ハ)無縁慈は首楞嚴三昧・法華三昧・九種大禪などの非有漏非無漏禪中において、それぞれ發得させられるといふ。⁽¹⁶⁾

先述したように、(33)下段の『方等餓法』の文は、『次第禪門』の(一)慈無量心の中の(ハ)無縁慈を根底として説示している。すなわち、衆生は五陰に他ならず、諸法実相智慧をもつて、衆生の本性をみるならば、仏性を不即不離の関係において具足しているという。以上のことより、(33)上段の「方等三昧」の文は、『大般涅槃經』を根拠として『次第禪門』へ、さらに『方等餓法』へ、そして「方等三昧」へと思想的に展開したものであることが知られる。

(34)の上段は、「圓壇」を実相不動地とし、「絵幡」は迷を転じて動出の解を生ずるとして、円融実相の立場から、動出不動出は不相不離として把捉していく。

四種三昧の典拠とその考察〔中〕（大野）

つぎに、(36)の上段には、「二十四像」を「逆順に十二因縁を觀する覺了の智」となし、また、(42)の上段にも、「二十四戒」を「逆順の十二因縁、道共戒を發す」と述べ、いづれも「逆順の十二因縁」に當てて了解している。「逆順」とは元來、逆流と順流のことをいう。逆流とは衆生が三界の惑を断じ、生死の流れに逆って、涅槃に趣くことをいい、順流とは衆生が惑を起こし業を造くり、生死の流れに順つて涅槃の道に背くことをいう。(36)・(42)下段の『方等懺法』には、

二十四の形像とは、十二因縁の逆順の觀を表わす。凡そ二十四支順に十二覺の三仏性を觀す。逆に十二覺の三仏性を觀す。所謂、無明・愛・取は是れ了因仏性、行・有は是れ緣因仏性、識・名色等は是れ正因仏性なり。二十四支を覺するは、すなわち二十四の仏なり。

とあり、十二因縁の逆順によつて、二十四の形像を觀するに、正因仮性に識・名色・六入・触・受・生・老死を、了因仮性に無名・愛・取を、緣因仮性に行・有をおののおの対させ、十二因縁を三因仮性に當ててある。いま、前期時代における智顕の十二因縁觀をみると、『次第禪門』卷第三上の「内善根發」には、『大集經』に基づく三世・果報

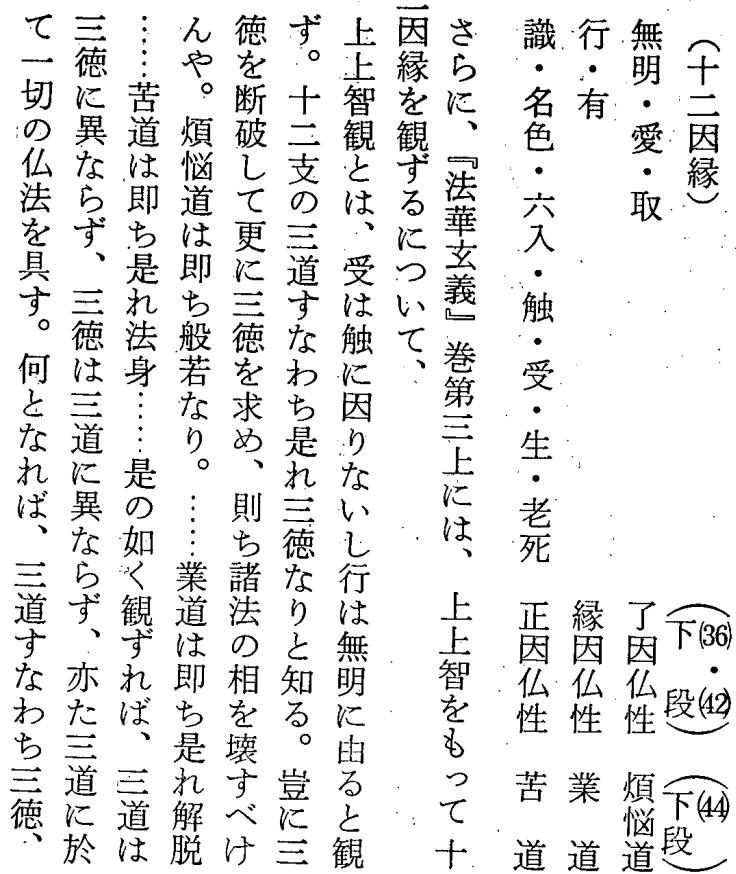
一念十二因縁の三種を掲げている。その中の一念十二因縁には、

忽然として自から刹那の心、人なく我なく性もと実なしと見る。所以はいかん、一念起ころとき必らず因縁を藉る。因縁というは即ち十二因縁を具す。縁に自性なし、一念豈に定実あらんや。若し一念の實を得ざれば、即ち世の性の邪執を破す。心は正定と相應し、智慧を開発することなお涌泉の如し。身口清淨にして諸の邪行を離るること⁽¹⁸⁾。

と述べ、一念は十二因縁において起ころが、しかし十二因縁を無自性と觀じて、性の邪執を破すとされる。ここでは仮性について言及されていない。この三種の十二因縁については、『法界次第初門』卷中之下の「十二因縁初門第四十」⁽¹⁹⁾にも詳説されている。説相は先の『次第禪門』とほぼ同様である。また、(42)の下段の『方等懺法』には、

違ること百二十匝とは、即ち十二因縁を表わす。凡そ十種の觀、百二十支あり。束ねてこれを言わば、但だ是れ三道。愛・取は是れ煩惱道、行・有は是れ業道、識・名色等は是れ苦道なり。三道を循環して、常に觀境となす。故に違ること百二十匝なり。一呪、一支を対破すれ

ば即ち三道を破す。三道を破すれば即ち是れ三障を破す。⁽²⁰⁾ とあり、十二因縁をそれぞれ煩惱・業・苦の三道によつて総括している。すなわち、(無名)・愛・取を煩惱道に、行・有を業道に、識・名色・六入・触・受・生・老死を苦道に当てている。いま、(36)・(42)下段と、(44)下段の『方等餓法』の文の関係を図示すると次のごとくである。



三徳は是れ大涅槃にして、秘密藏と名づく、此れ即ち仏果を具す。……此れ即ち仏因を具す。⁽²¹⁾

と、煩惱道を般若、業道を解脱、苦道を法身に相即させ、三道はすなわち三徳であり、秘密藏のことであるとして、仏因・仏果を具足しているという。ここにいう上上智観は、いわゆる円教の智観であり、円教の十二因縁観を表明している。先の『方等餓法』の三因仮性は煩惱・業・苦という逆説的な表現でもつて語られているが、円教の思想に通づることは明らかである。『方等餓法』では、逆順の二観をもつて三因仮性を観せよ、というのであり、より順観の立場から説示されている。一方、先の『法華玄義』では、逆観の立場から説示されると考えられる。また、『摩訶止観』卷第五上の観不思議境を明かすところに、菩薩・仏の類は、縁因を相となし、了因を性となし、正因を体となし、四弘を力となし、六度万行を作となし、智慧莊嚴を因となし、福德莊嚴を縁となし、三菩提を果となし、大涅槃を報となす。云々。因縁に逆順あり。生死に順ずる者は、有漏の業を因となし、愛・取等を縁となす。生死に逆らう者は、無漏の正慧をもつて因となし、行行を縁となし、ともに生を損じ惑を破す。界外の

生死に順ずるは、また無漏の慧をもつて因となし、無明等を縁となす。もし生死に逆らうは、すなわち中道の慧をもつて因となし、万行を縁となす。ともに変易の生死を損するが故なり。因縁すでにしかなり。余の者の逆順もこれに準じて知るべし。⁽²²⁾

とあり、円融実相の立場から、界内・界外に分けて十二因縁の逆順を論じている。⁽³⁶⁾・⁽⁴²⁾上段の文は、いづれもこの立場から述べたものである。「二十四像」「二十四戒」は、いづれも十二因縁を逆観・順観すれば二十四となるので、十二因縁の逆順に充当して論じたものと考えられる。⁽³⁶⁾上段では、「二十四像」を「覚了の智」と規定し、円教の觀法を本質として説示し、先の『方等懺法』の如く、三因仏性には言及されていない。

つぎに、助上段の「餚饌」は、『方等陀羅尼經』では、「餚饌」となっている。意味の上からは、同義である。智顗は、この「餚饌」を「助道觀」となし、食物を仏や比丘・比丘尼に供養することによって、これを助けとして覺証のさまたげを対治するという。

⁽³⁸⁾上・下では、「(著)新(淨)衣」を、五忍中の第五「寂滅忍」となしている。寂滅忍は、『仁王般若經』卷上によ

れば、諸惑を断じて寂靜に安住した第十一一切智地であり、自性清浄にして本覺の性で、諸仏一切智智のことであるといふ。⁽²³⁾

⁽³⁹⁾上段では、「七日」を「七覺」つまり、三十七道品中第六番目の七覺分に当てている。悟りの智慧を助けることをいう。

⁽⁴⁰⁾・⁽⁴¹⁾の上段も、一心三觀の立場より、文々を解釈・充當している。下段の『方等懺法』の文と比較してみると、思想的には同一線上にあるも、『方等懺法』撰述時には、未だ円教の一心三觀は確立されていないことが知られる。智顗の円融実相觀は、一日にして大成されたものではなく、若き日よりの思索と実践が實に重要なポイントであることが、この両文を検討して明らかである。その意味で、智顗の止觀思想を解明するには、より前期時代の著述にその鍵があるとわたくしは考えている。

⁽⁴²⁾の上段では、「二十四戒」を、「逆順の十二因縁、道共戒を發す」と解釈している。道共戒について、『法華玄義』卷第三下には、

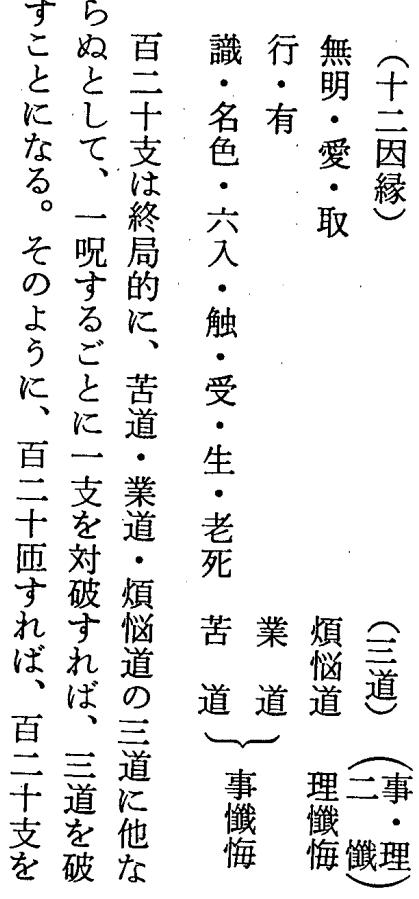
方等の二十四戒の流の如し、名づけて余戒となす。……護持正念念清浄戒とは、即ち四念處の理を觀する正念な

り。未だ真を発せざと雖も、相似の念に由りて能く真道

を發し、道共戒を成す、故に正念念清淨戒と名づく。：

道共戒は分別心に依りて發し、行善の義に属す。動不動俱に是れ毘尼なり。何となれば、戒は防止を論ず。定共の心得れば復た惡を起こさず、道共を得て真を發すれば永く過罪無し。故に俱に是れ戒なり。⁽²⁴⁾

とあり、道共戒は別名正念念清淨戒で四念處の理を觀する正念であるといい、分別心によりて發るものであるといふ。つぎに、(44)上段の文は、下段の『菩薩瓔珞本業經』卷下の文を根拠として、十二因縁に十種すなわち百二十支あることを明らかにする。(44)・(45)下段の『方等懺法』の文によつて図示すれば次のとくである。



破すことになるという。

(45)の上段では、先に図示したように、三道中の苦道と業道を事懲悔に當て、煩惱道を理懲悔に充當させている。事懲悔は隨事分別懲悔ともい、礼拝や誦經などの實際に身・口・意の行為にあらわす懲悔をいう。それに対し、理懲悔は觀察實相懲悔ともい、一心三觀などの圓教の觀法を本質として、実相の理を觀じて罪を滅する懲悔をいう。智顥は、懺法の本質は理懲にあるとして、事懲は理懲のための前方便的性格しかもちえないことを明らかにする。

つづいて、(46)・(47)・(48)上段には、業道・苦道・煩惱道の三道を懲するための理論的根拠として、『方等陀羅尼經』の文をそれぞれ挙げてある。それによると、沙弥・沙弥尼・比丘・比丘尼等の諸戒を犯した場合に、至心に懲するということは、業(障)道を懲することになるという。また、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を清淨にすることは、苦(障)道を懲することであるという。さらに、第七日分中において十方の一切諸仏を見、法を聞いて不退転の心を得るならば、煩惱(障)道を懲することであるという。

(49)の上段では、既説の論理を踏まえて、業障・苦障・煩

四種三昧の典拠とその考察〔中〕（大野）

惱障をそれぞれの餓法によつて滅するならば、三障の根源となつてゐる十二因縁に自性なく、大樹が倒れるように、壊れ去つていく。実相を思惟することによつて、人間の根源的な悪性の滅することを明らかにする。

(50) 上段において、この『方等陀羅尼經』に基づく餓悔法こそ、諸仏の實法に基因した眞実の餓悔であることを、以上のごとき天台実相論を根底として明示しているのである。

最後に、(52)の勸修には、『方等陀羅尼經』と『方等餓法』の文を依用して、諸仏の得道はみなこの方等餓法によるとして、この餓法こそ仏の父母であり、世間無上の大宝であるといふ。

四 結 語

以上において『摩訶止觀』卷第二上の「半行半坐三昧」の一つとして説示される「方等三昧」と、その典拠となる諸經論との異相について論究した。智顗は、『方等陀羅尼經』の所説を根幹として、禪定修行の障害となる自からの過去世と今生における善惡の業相を餓悔対治するための具体的な方法を『方等三昧行法』中に体系化した。この『方等

三昧行法』は、わづかに智顗独自の思想的展開があるにしても、經の所説を簡略化した傾向が強い。ただ、のちの円頓止觀の原始的形態はうかがわれる。つぎに撰述した『國清百錄』卷第一所収の『方等餓法』になると、「心三觀の立場からは説示されていないが、より独自の把握を前面に出していく。既述の典拠からも解るように、『方等三昧行法』のみを典拠とした箇所はなく、そのほとんどが、この『方等餓法』を常に念頭においていることが知られる。

『方等餓法』は、単に餓悔法を明かすのではなく、より餓悔法そのものが、止觀実修の根底になければならぬことを体系化している。それをより具体的に確立大成したのが、この『摩訶止觀』所説の「方等三昧」である。すなわち、餓悔法を実修することが、そのまま円頓止觀の実践に他ならぬというのである。「方等餓法」は、「方等三昧」に至つて、はじめて完成したとみるべきである。『國清百錄』所収の『方等餓法』を、『摩訶止觀』において「方等三昧」と改めたことは、實に重大な思想的展開と意義を有しているといわねばならない。このように、智顗の廣説する思想と実踐の体系は、一日にして大成されたものではなく、実に長い歳月を費やして思惟し実修した結果、到達したもの

であることが知られるのである。

智顗は、『摩訶止観』所説の「方等三昧」において、仏道修行（觀法）と懺法は、不即不離の関係にあることを明示する。すなわち、仏道修行（觀法）そのものが懺悔行を根底とし、懺法を修することがそのまま仏道修行（觀法）であるという。自己の内包している罪業性を発露しない限り、決して解脱はあり得ないことを隨處で主張する。わたくしは、智顗の実相論の根底を、この懺法の中に入るのである。智顗の高揚する止観思想は、ごまかしなく人間の本性を凝視した結果生まれたものであり、どこまでも現実の自己を離れてあり得ないことが知られるのである。『摩訶止観』卷第七下には、懺悔の真義について次のように述べている。

懺とは、先の惡を陳露するに名づけ、悔とは、往を改め來を修するに名づく。仏の智は遍ねく照らし、仏の慈は普ねく摸す。われ、身・口をもつて仏の足下に投ず。願わくば世間眼、わが懺悔を証したまえ。われ、無始より無量の仏道を遮えるの罪あり。無明に偏まられ、正真を識らず、三界にしたがつて繋がれ、身・口・意を動かし、十惡罪を起こせり。三宝・六親・四生・五道に不饒

四種三昧の典拠とその考察〔中〕（大野）

益の事を作し、三乗の心を發する人を破し、五・七の逆（罪）を造り、みずから作し、他に教え、作すを見て隨喜せり。まさに現生ののち諸の苦惱を受くべし。三世の菩薩が仏道を求むるときに懺悔したまえるがごとく、われもまたかくのごとし、己が昏沈にして智慧の眼なきことを傷む。この語を發するとき、声涙ともに下り、至誠責実にして五体を地に投ずること、樹の崩れ倒るるがごとし。⁽²⁵⁾ 我人を摧折し、衆惡傾殄す。これを懺悔と名づく。

われわれのために教示された智顗の懺法の真実義を心して聞かねばならない。

注

(1) 『宗教研究』第五二卷第二輯（通巻、第二三七号）五一
七七ページ。

(2) 『印度学仏教学研究』第二七卷第一号、二五四—二五九
ページ。

(3) 『方等三昧行法』（大正蔵四六・九四五c）

(4) 同右（大正蔵四六・九四五c—九四六a）

(5) 『次第禪門』卷第二（大正蔵四六・四八九c—四九〇b）
(6) 『天台小止観』（大正蔵四六・四六五c—四六六c）。関

四種三昧の典拠とその考察 [中] (大野)

口真大著『天台止観の研究』の「七 天台止観における坐禅」(二九九—三七五ページ)には、『天台小止観』『現行天台小止観』『円覚經道場修証儀』『長蘆慈覺頤禪師坐禪儀』『勅修百丈清規』『興禪護國論』『普勸坐禪儀』『坐禪用心記』などの本文対照がなされ、詳細な研究をされている。

(7) 『摩訶止観』卷第四下(大正藏四六・四七c—四八a)

(8) 佐藤哲英著『天台大師の研究』二一一ページには、『方等三昧行法』と『摩訶止観』の文を比較したのち「既述の如く摩訶止観の平行半坐の部分には、方等三昧行法の影響が何等認められないに拘らず、かかる微細な点での一致は、方等三昧行法が摩訶止観と作者を一にすることを示すものであろう」と述べられている。また佐藤博士は、「止観に焼海岸香といった海岸香の名は、方等儀法には見られず、方等三昧行法の海渚岸香とつながるものと認めざるを得ない」と述べられるが、「海渚岸香」の語は(9)の下段の『方等陀羅尼經』にあり、経の隨處で説かれている。

(9) 佐藤哲英博士・前掲書二二〇ページ。

(10) 『法華三昧儀儀』(大正藏四六・九五〇b—c)

(11) 『摩訶止観輔行伝弘決』卷第二之二(大正藏四六・一九〇c—一九一a)

(12) 大正藏一五・二四二c—二六九c

(13) 大正藏一五・三三三a—三四二b

(14) 『次第禪門』卷第六(大正藏四六・五一八a)
(15) 同右(大正藏四六・五一六c—五一八a)。また、同右

(大正藏四六・四九五b—c)にもある。「無縁の慈」は、元来、『南本涅槃經』卷第十四に、「無縁の慈とは、衆生を縁せず、また法を縁せず、如來を縁するが故に無縁と名づく」(大正藏一二・六九四c)と述べ、無縁の慈は、衆生や法の二邊を縁せずして、如來のみを縁するので無縁という。智顥はこの經に基づいて、『法華玄義』卷第四下に、「無縁の慈悲は能く法界の依止となす。磁石、普ねく吸いて帰趣せざる莫きが如し」(大正藏三三・七二五b)とあり、また、『摩訶止観』卷第六下にも、「一に無縁の慈悲とは、すなわち如來の慈悲なり。この慈悲は、實相と同体にして、衆生の相を取らず、故に愛見にあらず。涅槃の相を取らず、故に空寂にあらず。空寂にあらざるが故に衆生縁にあらず。二邊の相なし、故に無縁と名づく。……上の兩觀の慈は慈に辺表あるも、如來の慈はすなわち齊限なし。上の兩觀の慈は菩薩と共にするも、無縁の慈は独り如來にあり。上の兩の慈は包含するところなきも、如來の慈は一切の仏法、十力・無畏を具す。これ如來藏の諸法の都海なり。」
「心に知るべし、慈は三諦を具するなり」(大正藏四六・八一a)とあり、さらに、『摩訶止観』卷第八下にも、「魔

界即ち仏界なるも、衆生は知らず。仏界に迷い、横に魔界を起こし、菩提の中において煩惱を生ず。この故に悲を起こす。衆生をして、魔界において即ち仏界、煩惱において即ち菩提ならしめんと欲す。この故に慈を起こす。慈は無量の仏なり、悲は無量の魔なり、無量の慈悲はすなわち無縁の一大慈悲なり」（大正蔵四六・一一六b）等と述べ、

智顕はこの「無縁の慈悲」を天台実相観の根底にしていることが知られる。章安灌頂も、『涅槃玄義』の中で、「涅槃無名」の根拠として、経の「無縁の慈」を依用する。詳しく述稿「章安灌頂における大般涅槃釈考」（『印度学仏教学研究』第二三卷第一号）を参照していただきたい。

- (16) 『次第禪門』卷第六（大正蔵四六・五一八a）
(17) 『國清百錄』卷第一「方等懺法」第六（大正蔵四六・七九八b）

- (18) 『次第禪門』卷第三上（大正蔵四六・四九五c—四九六a）
(19) 『法界次第初門』卷中之下（大正蔵四六・六八四a—六八五a）
(20) 『方等懺法』（大正蔵四六・七九八b）

- (21) 『法華玄義』卷第三上（大正蔵三三・七一一b）
(22) 『摩訶止觀』卷第五上（大正蔵四六・五三c）
(23) 『仁王般若經』卷上（大正蔵八・八三六c—八三七a）

四種三昧の典拠とその考察〔中〕（大野）

- (24) 『法華玄義』卷第三下（大正蔵三三・七一七a）
(25) 『摩訶止觀』卷第七下（大正蔵四六・九八a）
〔昭和五十三年度文部省科学研究費研究助成（奨励研究・A）による研究成果の一部〕